

## 短歌にできること 谷岡亜紀

少し前になるが、同人誌「ES廻風」の去年五月に出た号に、谷村はるか「公募される言葉―震災の後の断想」という文章を書いている。去年読んだ時点でも大いに注目したが、改めて読み返してみても、「震災と短歌」のみならず、短歌や言葉そのもののへ本質的な問いとして、今でも色あせない重要な問題提起がなされていると感じるので、あらためて紹介したい。

まず谷村は、「被災地へのメッセージをメール、ファクスなどでお寄せください」と呼び掛けるラジオ番組で、アナウンサーが聴取者からの「応援の言葉」を読んだあとで、「被災者の心境を思うと軽々しくがんばれなどとは言えない、という意味のことを言った」ことに違和感を持つ。では「だいたい何のための公募なのだろう」「この添削のような行為には、言葉のプロを自認する人々の、言葉への過信を感じる」とした上で次のように述べる。

そもそも、いつだって、心に思うことを正確に言葉にできないことなんてあるだろうか？ 思ったことの半分も伝えられないのが普通ではないだろうか。（中略）そして、その不自由さを一番知っているはずなのが『言葉のプロ』たち、アナウンサーや作家を含む語り手・書き手たちなのではないか。心と言葉を近づける苦勞、難しさを誰よりも痛感しているはずだ。言葉のプロこそ、言葉を信じすぎることなく、その不

完全さを知っているべきだ。

谷村のこの言葉は非常に正直でまっとうだ。この人は、口当たりがよい型通りのレットテルや「良識」に絡め取られることにあらがい、ともかく自分の頭で考えようとしている。それが貴い。震災のあとに世に溢れた「がんばれ」という決まり文句には、確かに無責任なうさんくささがあつた。だが、それを批判する「軽々しくがんばれなどとは言えない」という言葉もまた、「良識」による型通りの決まり文句を逃れ得ていただろうか。その思いは私を絶望的にさせる。へがんばれ／がんばれなんて言えないの。不毛な蹉跌に、何らかの突破口はあるだろうか。言葉を相手にする以上は、その絶望的な問いを問いつづけなくてはならない。

谷村はまた新聞紙上の「激励の俳句・短歌募集」についても、「読むうちに、これらは『被災した方々を励ます俳句、短歌』なのだろうか、これらの言葉は誰のための言葉なのだろうかという疑問が起つてきた」と述べる。「もつと構造的な問題、俳句や短歌は『被災した方々を励ます』ことができるものなのか」「本質的には、どんな歌や句も、作者自身のために作られているのではないか」。うーん。難しい問いである。私は今、この谷村の問いにどう答えることが出来るだろうか。そしてあなたは。

今わかるのは、私にとつて書くことは、過酷な現実と直面している誰か他の人たちの「ために」書くのではなく、時代のそうした過酷な現実の「ただなかで」書くことでなくてはならない、ということだけだ。どのような形であれ現実に参加すること。その道筋がからくも確保された時におき、私の言葉は、歌は、かろうじて無責任の謗りを逃れることができるのだと思う。